

パン屋の跡地にて

バイト1 (学生)

バイト2 (主婦)

バイト3 (フリーター)

学芸員

店主 (パン屋さん)

旅行者1

旅行者2

南相馬市原町区本陣前から上太田にかけての住宅街。

住宅街の一角が更地となり、掘り返されている。バイト1、2、3が遺跡を発掘している。

バイト1 「え？ アンモナイト？」

バイト2 「うん。そう。化石」

バイト1 「アンモナイトって。あれですよ？」

バイト2 「うん。あれ。ぐるぐるって渦巻いてるやつ」

バイト1 「すごい。いたんだ」

バイト3 「どこで？」

バイト2 「ここらへん」

バイト2、西のほうを示して、

バイト2 「あっちの。ちょうど、常磐道のあたりで発掘があって」

バイト3 「あのあたり？」

バイト2 「うん」

バイト3 「ホントだ。すぐそこ」

バイト2 「結構前だけどね。上の子生まれる前だから…10年か？ 10年くらい前の話だけど」

バイト1 「大きさどれくらいでした？」

バイト2 「いろいろだよ。わたしが掘ったのはこれくらい。この。拳くらいのやつだけど。
この。これくらいの。両手で抱えるくらいのも出たよ」

バイト1 「でかいっすね」
バイト2 「ね。記念に写真撮っちゃった」
バイト1 「え？ それ見てみたい」
バイト2 「明日持ってこようか？」
バイト1 「いいですか？」
バイト2 「わかった。持ってくるね」

バイト2、発掘に戻る。
バイト2の様子を見ている、バイト1とバイト3。

バイト1 「やっぱり。なんか、ベテランの人いると心強いですね」
バイト3 「だな」
バイト2 「ん？」
バイト1 「いや。ここ数日、僕らずっと土掘るばかりで、石器ぜんぜん見つけてないんですよ」
バイト2 「わたしが来たからって、特になにも変わらないって」
バイト1 「いやいや。今日はいい石器が見つかりそうな気がします」
バイト2 「いい石器？」
バイト1 「そうです。とてもいい石器です。(バイト3に) そうですよね？」
バイト3 「いや。石器のいい悪いとか、俺ちょっとわかんない」
バイト1 「えー。味方だと思ったのに」
バイト3 「別に敵ではないけどさ」
バイト2 「…ただね。昨日、夜雨降ったから、案外石器は見つけやすいかもね」
バイト1 「え？」
バイト2 「雨で土が洗われてるから」
バイト3 「なるほど」
バイト1 「やっぱり、さすがですね」

バイトの3人からやや離れて、空の下に机を広げている学芸員。
学芸員は、史料を並べて、黙々と分類ラベルに記入し、リストを作っている。
そこに、店主がやってくる。店主は、パンを入れたビニール袋を提げている。

学芸員 「あ。お疲れ様です」
店主 「はい。差し入れ。焼きたてじゃないけど」

店主、ビニール袋を机の上に。

学芸員「え？ そんな気を遣ってくれなくても…」

店主 「朝の売れ残りだから」

学芸員「すみません。ありがとうございます」

学芸員、ビニール袋のパンを覗き見つつ、

学芸員「あっちはいいんですか？」

店主 「え？」

学芸員「お店のほう」

店主 「ああ。あっちはね。いると邪魔になっちゃってね」

学芸員「そんなことないと思いますけど…」

店主 「ものの置き場がないんだよ。臨時店舗が狭くて」

学芸員「そうなんですか」

店主 「それにね。移転してからどうも暇でね。張り合いがないっていうか」

学芸員「そのうち忙しくなりますよ」

店主 「だといいいんだけどね。…こっちは？」

学芸員「え？」

店主 「ここ。うちの土地はどうなの？」

学芸員「発掘ですか？」

店主 「うん」

学芸員「非常に興味深いですね」

店主 「なにか見つかった？」

学芸員「いや。工事中に見つかったきりですけど。…そろそろ、なにか出そうな気がします」

店主 「そろそろねえ…」

学芸員「ええ。期待できますね」

店主 「やっぱりうち、指定遺跡になるかなあ」

学芸員「…まだわかりませんが」

店主 「…また、立ち退きかなあ」

学芸員「…それはなんとも」

店主、発掘の様子を眺める。

学芸員、机の上の史料整理に戻る。

バイト2「ここらへんで？」

バイト3「そうそう。ここらへん一帯が俺らの担当エリア」

バイト3、東の方を示して、

バイト3「あそこがね。丘になってるでしょ？」

バイト2「ああ。あるね」

バイト3「あの丘の上に墓地があって。

墓地の奥が仮置場になってるんだけど。そこで刈った草、積んだりしてた」

バイト2「ふうん」

バイト3「それでさ。バイトの期間中、ひたすら草の…」

バイト1「え？ なにこれ？」

バイト1が土の中に何かを見つける。バイト2、3、バイト1の掘った土の中を見る。

バイト2、学芸員に、

バイト2「主任さーん。ちょっと見てください」

学芸員、バイトたちのいる現場へ。集まって地面を見ているバイトたち。

発掘現場の様子をじっと見ていた店主。ふと上空に不思議な物体を見つける。

店主、上空の不思議な物体を追いかけるように、その場を去っていく。

旅行者1、2、やってくる。

店主が、上空の何かを追いかけているのを見る。

2人、つられて空を見上げるが、何も見えない。

旅行者1、旅行者2、顔を見合わせる。旅行者2、首を振る。

発掘現場から道路を隔てて、自販機がある。

旅行者1、2、販売機で飲み物を買う。

二人、飲みつつ、

旅行者1「道がまっすぐだね。あっちまでずーっと」

旅行者1、南の方を示す。

旅行者2「ここ。やっぱり滑走路だったのかな？」

旅行者1「かもしんない」

旅行者2「正門まで、あとどれくらい？」

旅行者1、スマホで地図を見ている。

旅行者1「20分くらいかな。ずーっとこのまままっすぐ」

旅行者2「神社は？」

旅行者1「神社は正門の隣」

旅行者2「遠いなあ」

旅行者1「格納庫のブロックはもっと手前だけど…15分くらい？ かな？」

旅行者2「さっきのコンビニでなんか買っとけばよかった」

旅行者1「食べ物？」

旅行者2「うん。小腹が」

旅行者1「私も微妙にお腹空いたかも」

旅行者2「コンビニまで戻る？」

旅行者1「あ。でもここ。近くにパン屋さんある」

旅行者2「え？ どこ？」

旅行者1「評価もいいよ。もぐログ（もぐもぐログ）で3.5だって。すごくない？」

旅行者2「だからどこ？」

旅行者1「え？」

旅行者1、顔を上げる。

旅行者1、あたりを見回し、地図を見直し、発掘現場を示す。

旅行者1「そこ」

旅行者2「そこって。…あの、なんか掘ってる所？」

旅行者1「うん。地図上だと」

旅行者2「なくなっちゃったのかな？」

旅行者1「ぼいね」

発掘現場のバイトたちは小休憩となる。

バイトたち、手袋を外して、机の上の消毒液で手を拭く。

机の上のパンを選び始める。

学芸員が、発掘現場から道を渡って歩いてくる。

学芸員、電話で話している。

学芸員「ええ。萩原遺跡と違う形状で。はい。珍しいかもしれません。…はい。とりあえず」

学芸員、電話を切って、自販機へ。自販機で飲み物を4人分買う。

旅行者2、やってきた学芸員に、

旅行者2「なにか掘ってるんですか？」

学芸員「え？」

旅行者2「いや。あそこで」

学芸員「ああ。あそこは遺跡です」

旅行者2「遺跡？」

学芸員「はい」

旅行者2「遺跡ってのは、その、戦前とか戦中のなにかですか？」

学芸員「いやいや。新石器時代の遺跡です」

旅行者1「新石器時代？」

学芸員「はい。だいたい1万2千年前くらい」

旅行者2「そんな昔？」

学芸員「実際はもっと前かもしれません。いま、調査中なので」

旅行者1「すごい。ここって、そんな前から人が住んでるんですね」

学芸員「えーっと。そう。ですね。

…ここに住んでる。いや。正確には、ここに住んでたわけじゃないですけど」

旅行者1「え？」

学芸員「移動してたから。ほら、狩猟しながらのキャンプ生活なので」

旅行者2「ああ。決まった家がないのか」

学芸員「そうですそうです」

旅行者1「え？でも、貝塚掘ったり、竪穴式作ったりは？」

学芸員「それは縄文時代」

旅行者2「このより、もっと後の話だよ」

旅行者1「ふうん。ここはさらに前か」

学芸員「無理やり言うとしたら、ここらへん一帯。相双地区全体が住処だったっていうか」

旅行者2「ここらへん一帯ね…」

学芸員「場所に対する意識っていうんですかね。

そういうものが、定住するようになった人間とは違ってるんですよ」

旅行者2「なるほど…」

旅行者2、あたり一帯を眺める。

旅行者1 「…パン屋さんは？」

旅行者2 「そうだった」

学芸員 「パン屋？」

旅行者1 「(学芸員に) あそこってパン屋じゃなかったんですか？」

旅行者1、学芸員にもぐログの地図を見せる。

旅行者1 「地図だと、こうなってるんですけど…」

学芸員 「確かにちょっと前までパン屋さんでしたよ」

旅行者1 「潰れちゃったんですか？」

学芸員 「いやいや。お店を改装するときに基礎を掘り直したら、石器が見つかったんですよ。それで、市のほうで遺跡調査をしようってことになって」

旅行者2 「パン屋は？」

学芸員 「臨時店舗が駅の方にありますよ。あっちの場所はね。えっと。詳しい場所はね…」

学芸員、旅行者1のスマホで地図を見せてもらう。

バイト2、道を渡って歩いてくる。

バイト2 「主任さーん。のど乾いた」

学芸員 「ああ。ごめん」

旅行者1 「すみません。呼びとめちゃって」

バイト2 「主任のお知り合いですか？」

学芸員 「いや、ここにあったパン屋さんを訪ねて来られた方で」

バイト2 「ああ。ここの、おいしいですもんね」

旅行者2 「そうじゃなくて」

バイト2 「え？」

学芸員 「違うんですか？」

旅行者2 「パン屋はあれです。たまたま地図見て寄ろうと思っただけで」

学芸員 「ああ。そうでしたか」

バイト2 「…ご旅行かなにかですか？」

旅行者1 「はい。飛行場の跡を見に来て」

バイト2 「飛行場？」

旅行者1 「ええ。ここ。ここらへん、昔は飛行場だったって聞いて」

学芸員 「原町飛行場？」

旅行者1 「はい」

学芸員 「ああ。なるほど。…そうか。そうなんですね」

バイト2 「ここって、飛行場だったんですか？」

学芸員 「そうそう。戦時中の話ね」

バイト2 「ああ。軍隊の」

学芸員 「うん。陸軍のほうね。…ちょうどこちらへんが滑走路の北の端かな」

発掘現場のバイト1、3、バイト2を呼ぶ。

バイト3 「おーい！ ひからびちやうよー！」

バイト2 「ごめん！ いまいくー！」

バイト2、学芸員から飲み物を受け取る。

学芸員 「待たせてごめん」

バイト2 「失礼しますね」

バイト2、道を渡って、発掘現場へ。

バイト1とバイト3に自販機の飲み物を渡す。

3人、飲む。

学芸員 「飛行場だったら、ここの道をずーっとまっすぐ行くと、昔の正門跡があって」

旅行者2 「あ、わかります」

旅行者1 「丘の上にある慰霊碑も見てきました」

学芸員 「え？ あそこの、墓地のそこから歩いて来たんですか？」

旅行者1 「はい」

学芸員 「随分歩いてきたんですね」

旅行者2 「あんまり歩いた感じはないですけど」

旅行者1 「道がまっすぐでしょ？ 遠近感がなくて、気づいたらすごい歩いてたみたい」

旅行者2 「やっぱり飛行場作るのに、土地を整備した後なんですかね？」

学芸員 「ここね。中村藩の放牧場だったんですよ。

だからずーっと一面、もともと、だだっ広い野原だったらしくて」

旅行者2 「祭りの。鎧着て走る、野馬追（のまおい）のところと一緒にですか？」

学芸員 「ええ。こちらへんも昔は馬が駆け回ってたらしいです」

旅行者1 「そうなんだ…」

旅行者2「ふうん」

学芸員、旅行者1、2。真っ直ぐ続く道を眺める。

発掘現場のバイト1、2、3、飲み物を飲みつつ、パンを食べている。

バイト3「ここ、飛行場って知ってた？」

バイト1「聞いたことがあります」

バイト2「あるんだ」

バイト1「少し前ですかね。震災を機に戦争遺構を見直そうっていうイベントがあって」

バイト3「なんだそれ？」

バイト1「あちこちから、ここに、飛行場跡を観に来る人たちがいたみたいです」

バイト2「それって震災と関係あるの？」

バイト1「原発事故に関連づけてるんですよ。

福島第一原発って、原発建つ前、戦争中は陸軍の飛行場だったんですよ」

バイト3「そうだったんだ？」

バイト2「なんだ。そっちの話か」

バイト1「え？」

バイト2「あの人たちも、そういう人たちなのかな？」

バイト1「そういう人たちって？」

バイト2「震災を機に戦争を見直そう、みたいなの」

バイト1「さあ」

バイト2「なんか私、そういうのがわかんないんだよね。なんでも繋げようとしてさ」

バイト1「…そもそも、あの人たちがどうか、わかんないですけどね。…ただの観光客かも」

バイト2「(バイト3に) どう思う？ そういうのわかる？」

バイト3、パンを食べ終わり、

バイト3「余ったカレーパン、もらっていい？」

バイト2「…え？」

バイト3「いや、カレーパン」

バイト2「それ、聞いてないふり？ それとも本当に聞いてなかった？」

バイト3「へ？」

バイト2「ちょっとなにそれ？」

バイト3「え？ なになに？」

バイト2「なんだよ。味方だと思ったのに」

バイト3 「え？ 俺、敵なの？」

バイト1 「土地かあ…」

バイト1、あたりを眺める。ふと上空に不思議な物体を見つける。

旅行者1 「ここも、空襲で？」

学芸員 「ええ。戦争も終わる少し前、昭和20年の夏になってからです」

旅行者2 「…言いかた悪いですけど、こんな田舎に？」

学芸員 「そうですね。そこはやっぱり、ここに飛行場があったからですかね」

旅行者2 「ああ。そうか」

旅行者1 「空襲って、何度も来たんですか？」

学芸員 「いや。二日間だけです」

バイト2、3も空を見上げる。そのまま上空を見上げている。

学芸員 「ここは。ここらへんは。8月の9日に」

学芸員、東のほうを示して、

学芸員 「あっちの。もっと、海のほうは。8月の10日になって」

学芸員、上空に不思議な物体を見つける。

旅行者1、2も、つられて上空を見上げる。同じように不思議な物体を見つける。

その場にいる全員が、遠くの空を眺めている。

やがて、上空の不思議な物体を追いかけるように、その場を去っていく。

それぞれのスピードで。